

2. 「枕草子」(現代語訳)

はる あけぼの ひ のぼ しろ やま あた そら すこ あか
春は曙。日が昇るにつれてだんだんと白くなる、その山の辺りの空が少し明る
くなって、紫むらさきがかっている雲くもが細くたなびほそいている様子ようすがいい。

なつ よる つき で い やみよ ほたる おお と か
夏は夜。月が出ているときは言うまでもない。闇夜であっても、蛍ほたるが多く飛び交
っている様子ようすもいい。また、ほんの一いち、二匹にひきが、ほのかに少し光すこ ひかって飛んでいくの
も趣おもむきがある。そんな夜には、雨よるなど降あめっても風情ふがある。

あき ゆうぐ ゆうひ やま は ちか ころ からす い
秋は夕暮れ。夕日ゆうひがさして山の端やまにととても近ちかくなっている頃ころに、鳥からすがねぐらへ行
こうと、三羽さんわ四羽よんわ、二羽に三羽さんわと飛び急といでいる様子ようすさえ、しみじみとした情緒じょうちよがあ
る。まして雁かりなどが連つらなって、とても小ちいさく見みえるのは実じつに趣おもむきがある。日ひが落おち
てから、風かぜの音おと、虫むしの音ねなどが聞きこえるのは、やはり何なんとも言いえないものだ。

ふゆ そうちよう ゆき ふ あさ い しも お あた いちめん しろ
冬は早朝。雪ゆきが降ふっている朝あさは言うまでもない。霜しもが降りて辺り一面おが白あたくなっ
ているのも、またそうでなくても、とても寒さむい朝あさに、火ひなどを急いそいでおこして、炭すみ
持ち運もぶのも、冬ふゆの朝あさにふさわしい。昼ひるになり、寒さむさがだんだんゆる緩ゆるんでいくと、火桶ひおけ
の炭すみも白しろい灰はいが目立めだってきて感かんじ悪わるい。

にく いそ ようじ とき き ながばなし きやく
憎にくらしいもの。急いそぎの用事ようじがある時ときに来て、長話きやくをする客きやく。それがどうでもい
いような人ひとなら、「後あとでまた」と言いってでも帰かえすこともできるが、さすがに遠慮えんりよすべ
き立派りっぱな人ひとにはそうもできず、本ほん当とうに憎にくらしく不愉快ふゆかいだ。

たにん うらや じぶん み うえ なげ たにん い
他人たにんを羨うらやましがり、自分じぶんの身みの上うえを嘆なげき、他人たにんのことをあれこれ言いい、ちょっ
したことも知しりたがり聞ききたがったりして、言いってくれないと恨うらんで、悪口わるくちを言いい、
また、ちょっきと聞ききかじったことを、自分じぶんが前まえから知しっていたかのように他人たにんに調子ちょうし
よく話はなすのもととても憎にくらしい。

こころ
心がときめくもの。すずめ こ か
雀の子を飼うこと。ちい こども
小さい子供を遊ばせている ところ まえ とお
所の前を通
ること。じょうひん こう
上品な香をたいて、ひとり横になっているとき。かみ あら けしょう
髪を洗い、化粧をして、
こう かお
香の薫りがしみたきもの き
着物などを着たとき。とく み ひと
特に見てくれる人がいなくても、こころ なか
心の中は
やはりとても ころよ
快い。